

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第7回

大類 善啓

《前回までの粗筋 新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促し、韓も1953年第1回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時、廖は韓に中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出してほしい」と要請した。日本に戻った韓は、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、韓は通訳などでも大活躍。1970年には訪中し、新しい中国を見る。文化大革命の時期は、日本にいる華僑とはいえ様々な問題にぶつかった。その混乱のなか、中国にとって必要なのは日本の先進的な科学技術や工業技術ではないかと思い、『日本工業技術』という雑誌の刊行を思いつく。横やりも入ったがなんとか発行にこぎつけた。イデオロギーや思想ではなく、現実を見ていこうという動きがやっと芽生えてきた。》

.....

私が親しくしている80歳を少し超えた華僑が、かつて語った言葉が今でも強く胸に刻まれている。華僑といっても私が出会った時、すでにその人は日本籍になっていた。父親は中国東北部出身で戦前に京都大学に留学し日本女性と結婚した。二人は中国に帰国し、父は満鉄に入社、彼は吉林で生まれた。中学は日本が支配していた時代の北京中学に進み卒業した。日本の敗戦前に、「お前は日本語で育ったから日本で生きろ」と父から言われ、戦後ずっと日本で育ち大学まで進んだ。弟妹たちは北京で育った。両親も中国にいたから、中国の内情は親族から本音を聞いて知っていた。

1980年代の初め、私に語ったその印象深い言葉とは、新中国が成立した直後の1950年代の中国についてだ。「当時の中国人たちは本当に心から、国の建設のために一生懸命働いたんだ」という言葉である。

しかしその後の中国は、絶えず政治闘争が起こり、知識人たちを悩ませた。とりわけ、1966年から始まった文革時代はひどいものだった。

1 憧れの作家、巴金が来日した

文革が始まる以前の、古き良き時代の1960年代、中国からは文化・芸術分野の代表団が続々と来日し公演もした。その都度、韓慶愈は中国側から通訳を依頼された。

韓は常に訪日代表団に同行した。その中で、印象深いいくつかの訪日団を紹介しよう。まず、1961年東京で開催されたアジア・アフリカ(AA)作家会議に出席するため、中国作家代表団が来日した。団長は巴金だ。韓は日本留学前の中学時代を過ごしたハルピンで、巴金の『家』を読み感動した。それ以来、憧れの作家だった。

巴金は1904年生れ、中国の現代文学を代表する作家だ。四川省成都の封建的な官僚地主

の家に生まれ、成都外国語専門学校に進んだ学生時代からアナーキズムの影響を受けた。1923年家を出て上海、南京へ行き、アナーキズム運動に従事しフランスへも留学した。その後上海で本格的に作家活動を歩み、33年に長編小説『家』を発表した。

この作品は、旧家の大家族制度の抑圧に苦しみ、反抗する青年を描いている。この作品は多くの読者を魅了した。新中国建国後、巴金は中国作家協会の副主席を務めたが、文革時代は当然のように迫害を受けた。しかし1977年に復活した。

巴金は、これからのために、文革時代の悲惨な記録を残しておくべきだと「文革記念館」建設を提唱したが実現はしなかった。この他、エスペラントの普及にも努力し、上海エスペラント協会の名誉会長にもなっている。中国知識人の良心ともいわれた巴金も2005年10月上海で死去した。享年、100歳だった。

2 川端康成と骨董談義

この団の秘書長は詩人の林林だった。林林は戦前、早稲田大学に留学した。1990年代に日本の俳句に倣い、漢字で俳句を創る<漢俳>を堤唱した。過日来日した首相の温家宝が漢俳を披露したことがあった。韓はこれを見て、「中国でも漢俳が定着したのだなあ」と感慨を深くした。またこの団には、李茫という日本文学者で芭蕉の研究者や劉白羽という延安に行き共産党に参加した作家、また謝冰心などもいた。

謝冰心は1900年生れ、五四運動の時代から活躍する作家であり福建省出身だ。1923年、優秀な成績で燕京大学を卒業後、アメリカへ留学する。そのアメリカへ行く船の中で、作家の呉文藻と知り合い、後に結婚した。

夫の呉文藻は戦後、GHQの下にあった対日理事会の中国側駐日代表団の第2組長として日本に滞在していた。当時はまだ国民党時代である。呉文藻は、広尾にある有栖川公園付近にあった事務所に詰めていた。韓はその頃、国際新聞の記者として代表団取材していた関係で、呉文藻とも、呉の妻である作家、謝冰心とも顔なじみだった。

憧れの作家でもある巴金団長の通訳として韓は、3週間行動を共にした。作家代表団の来日に際しては、日本側世話人である作家の堀田善衛や、評論家の松岡洋子とよく話し合った。そのほかで印象に残っているのは、鎌倉の自宅に川端康成を訪ねたことである。

当時は友好第一ということで、社会主義リアリズムや政治的な話などはせずに歓談した。川端は古い中国文化を評価していた。川端はまた有数のコレクターでもあり、所持している膨大な書や絵を持ち出し、巴金らに見せながら骨董談議に花が咲いた。

川端のほかには、野間宏や丹羽文雄、松本清張、石川達三、蔵原惟人らと歓談した。韓は、松本清張から新作の『砂の器』などをもらった。蔵原惟人は、通訳について、こういう場合はこういう表現がいいといったアドバイスをしてくれた。会議の通訳は竹内実が行った。今竹内は、日本における中国文学界の大御所である。

3 巴金との再会

一行はホテルよりも日本式の方がいいと、四谷にある福田屋に泊まった。今でも福田屋

は料亭として有名だが、旅館の方は数年前にやめてしまった。

団には他に、毛沢東や周恩来が日本の重要人物との会談の際の通訳として名を馳せた劉徳有も加わっていた。

巴金は帰国後年賀状をくれ、以後賀状交換が続いたが、再会したのは文革が終わった後の1978年、上海に行った時だった。受入れ側の担当者が「会いたい人はいますか」と聞いてきたので、巴金に会いたいと答えたところ、巴金の方から宿泊先の華僑飯店に来てくれた。

韓は1961年に巴金が来日した際に撮った写真を現像し持参していて、その写真を見せながら旧交を温めた。ところが韓の世話を担当してくれていた男は、その部屋から出ようとはしない。「安全部の人だったんじゃないかな」と韓は苦笑する。巴金と韓との会話を聴こうと聞き耳を立てている。巴金もそのことが気になっていただろうが、何も言うことなく話し合った。

4 映画スター趙丹との出会い

1962年の秋には映画代表団が来日した。中国では珍しい複姓である司徒恵敏が団長だった。映画界の有力者である。その団の中に40代後半の趙丹がいた。

趙丹は1915年に生まれ、1935年に新劇『人形の家』で主演し一躍有名になった。1930年代の後半、まだ国民党支配下の上海で、『十字路』『街角の天使』などに出演、作品が40本ほどある中国映画界を代表する映画スターである。新中国になって公開された作品には、『カラスと雀』『阿片戦争』『聶耳／人民作曲家の生涯』『不屈の人々』などがある。中でも『不屈の人々』は日本でも上映され、多くの人たちが観て、新しい中国の息吹を感じた。

中国が改革開放時代に入った1980年代になってから、筆者も『現代中国映画上映会』が主催する会で、『十字路』『街角の天使』、コメディタッチの『カラスと雀』を見て、いっぺんに趙丹のファンになった。趙丹は日本でいえば、往年の映画スターである佐田啓二と高橋貞二を足したような印象をもった。二枚目だが、三枚目的なセンスもある芸達者な役者である。

韓は来日中、その趙丹とずっと一緒に行動した。趙丹は、次回作は『魯迅伝』をやるのだと張り切っていたが、結果的にこの企画は文革が起これり中止になってしまった。趙丹の他には秦怡という女優や、俳優であり監督もやり配給関連の仕事もしていた凌子風もいた。凌は『林則徐』や『阿片戦争』などを演出した中国切っの監督である。また『燃え上がる大地』に出演した俳優、崔魏もいた。

一行は日本式の旅館で過ごした。朝食は旅館の女中さんがご飯や味噌汁をよそってくれる。そういう時にと、韓はユーモアをまじえて彼らに日本語を教えるのだ。例えば、<ご飯をください>という意味の中国語である<給我飯>(ゲイウォファン)を早口で言うと、実際にくごはん>とふうに聞こえるから使ってみろというのだ。趙丹が試してみるとすぐ通用した。そんな感じで日本語を面白く教えた光景が懐かしく思い出されてくる。

東京以外では横浜や関西にも足を伸ばした。関西では「ありがとう」とお礼を言う場合、

「おおきに」ということが多い。韓は<我給你>（ウォゲイニー、貴方にあげるという意味）の言葉を早く発音すれば、「おおきに」と相手には聞こえる。横浜は<咬个蛤蟆、ヨグハマ>（がまガエルを噛むの意）、名古屋は<拿狗牙、ナグヤ>（犬の歯を抜くの意）と発音すれば、そう聞こえるから喋りなさいとジョークを交えて日本語を教え、和気藹藹と2週間ほどの旅を楽しんだ。

この旅では、日本敗戦後も中国映画協会に働いていた森川和代も通訳に入り、日本側接待陣に入って韓を助けてくれた。日本の映画人では、俳優の長門裕之、南田洋子夫妻とも歓談したが、韓には高峰秀子、松山善三夫妻を自宅に訪問した時のことが印象深い。



《高峰夫妻宅での記念写真。前列左から2番目が松山善三、その右が女優の秦怡、そして高峰、司徒恵敏、松岡洋子。秦と高峰のちょうど真ん中あたりの後列にいるのが趙丹だ。一人おいて背の高い男が凌子風、右端の眼鏡をかけた女性が森川和代だ。韓が撮影したので韓自身は映っていない》

5 「陛下も殿下もいた代表団」

他の訪日団で、韓にとって記憶に残るのは、北京曲技団（雑技団）だ。丁波を団長とする団で、1963年の2月から5月にかけて、九州、四国、北海道を含む全国公演を行った。東京での公演場所は、今は閉館した新宿のコマ劇場だった。何度も追加公演するほど人気があった。

1963年10月には中国芸術団が来日した。林林が団長で、中国の歌と踊りを見せる団で

ある。楚図南を団長とする中国文化代表团も来日した。書家である常書鴻のお嬢さんである常沙娜も団員だった。常書鴻は敦煌の研究家、とりわけ莫高窟の研究家として世界的に有名で、フランス留学中に知りあったフランス女性と結婚、その間に生まれたのが常沙娜だった。彼女はデザイン科出身、今や中国を代表とするデザイナーとして活躍している。

1964年1月4日には京劇団も来日した。1956年の梅蘭芳以来の2度目の京劇団来日である。名前を第四京劇院と言った。団長は張東川、副団長として孫平化が来日した。団員の中に舞台監督として李殿華という人もいた。みんなは、「この団には陛下（平化）もいれば殿下（殿華）もいる」と冗談を言い合った。主な演目は『楊家女将』（楊家の女将軍たち）である。

6 趙丹「東京の休日」

ここに1冊の本がある。昨2010年末、惜しくも世を去った高峰秀子を書いた『いっぴきの虫』だ。梅原龍三郎がパリで高峰秀子を書いた肖像画が表紙になっている。この本には、高峰が親しく付き合った20人ほどの人たちの思い出話が詰まっている。有吉佐和子、松下幸之助、團伊玖磨、梅原龍三郎などの日本人ばかりの中で、たった一人、外国人である趙丹についての思い出が綴られている。

来日した最初の出会ってから、文革で消息を断った趙丹の行方を心配し、来日する中国人に趙丹のことを聞いたこと、そして感動の再会までが詳しく書かれている。趙丹ファンの私はもちろん、趙丹を知らない人でも涙なくして読めない文章だ。

趙丹のニックネームはアータン（阿丹）だ。高峰は書いている。

<趙丹は、中華人民共和国の、映画、演劇界の大スターである。日本でいえば、尾上松録と三船敏郎と森繁久弥と一緒にしてもまだ不足なような中国芸能界のピカーといえる人だ。そのアータンとの初対面は、今を去ること十数年も以前のことであり、>

ちなみにこの本の奥付を見ると、昭和53年8月発行と記してある。昭和53年といえば1978年、中国が改革開放時代に入った年である。趙丹が来日した1962年から16年ほど経っている。

高峰は、<中国大陸からのお客様は私服刑事に取り込まれるようにして行動し、日本国中がなんとなくピリピリしながら接するという風があり・・・>と記している。

どういうわけかその日、撮影所見学がキャンセルされたらしく、代表団の時間がぼっかり空いてしまったらしい。映画評論家の岩崎昶から、お宅へお邪魔していいかという電話が高峰に入った。高峰と松山善三夫妻は<中国も中国人も大好きな二人だから、もちろんふたつ返事で引き受けた>、<約十人のお客様に通訳が二人、そのうしろから二十人ほどの私服が続き、麻布警察からも警官が駆けつけて、わが家の周囲は蟻の這い出るスキもないほどの警護ぶりだった>

二人の通訳とは韓と森川和代さんである。これを書くに当たって、韓に高峰の『いっぴきの虫』を貸して感想を尋ねると、この警護ぶりは韓にとってはいつものことのように、韓はそれほど大げさなものとは感じていなかった。

しかし高峰にとっては、国交回復前の中国から10人ほどのお客様の初めての来訪である。果物や菓子、洋酒などを用意し、高峰は冗談を飛ばしてサービスに努めたが、中国人たちは行儀がよくても盛りあがらない。手をつけたものはお茶とトマトジュースぐらい。2時間経つと帰って行った。

＜食堂に残された茶菓の山を眺めて、私はなんとなくシュンとなった＞。

ところが翌日、通訳から電話が入った。電話をかけたのは韓ではなく森川さんだ。代表団の皆さんが、今日もまたお邪魔したいと言う。＜私の胸は、嬉しさに飛び上がった。今日もわが家へ来てくれるというのなら、おのれ、トマトジュースだけで帰してなるものか・・・＞

夕方5時きっかりに現れた彼らは、食堂のテーブルにある焼売、焼き鳥、おにぎり、ハム、ソーセージなどを囲んだ。＜酒瓶が乱れ飛び、割り箸が舞い、にぎやかな中国語が、ただ呆然としてつつ立っている私たち夫婦の頭上を往来した＞

ウィスキーに目許を染めながら、見事な京劇のふりを見せたのが、前日、中国一の俳優と紹介された趙丹だった。

それ以来、趙丹の紹介状をもっていろんな代表団が高峰の家を訪ねてきた。高峰と中国人たちとの交流が始まった。

7 文革で消えた趙丹

1963年の秋、高峰は夫婦二人だけで中国を訪問した。再三、中国政府から訪中の招待を受けていたが、団体行動に弱い高峰は乗り気になれず、二人だけで出かけた。

当時は、香港から汽車に乗り、羅湖を経て国境の深圳へ向かう。そこで待っていたのは花束をもったアータンこと趙丹だった。趙丹は両手を大きく広げ、花束ごと高峰夫妻を抱きしめた。趙丹とは広東では温泉につかり、蘇州では屋台の豆腐を食べ、北京では撮影所を見学し京劇や映画を楽しみ、上海では趙丹の家で蟹をご馳走になるといった1ヶ月の旅だった。

別れの時が来た。上海の駅で趙丹は、＜頬を伝う涙をふきもせず、動き出した私たちの汽車を追ってホームを走った。私たちは窓から身を乗り出してアータンに手をさしのべた。遠ざかるアータンの姿が、涙の中でボンヤリとゆれた＞

それから文化革命時代の到来である。趙丹の消息は消えた。

文革は、上海で女優をやり後に延安に行き、毛沢東夫人に収まった江青が権勢を好き勝手に振るった時代だ。趙丹はその江青と上海時代に、映画共演だけでなく私的な面で付き合いがあったこともあり、江青から徹底的にマークされ弾圧された。1930年代に出演した『武訓伝』は、人民に対して毒草であるとして批判され、連日吊るし上げられた。

高峰は、来日した中国人や在日中国大使館員に何度も「趙丹はどうしているか知りませんか」と尋ねた。知る者は誰もいなかった。

悪夢のような文革が終わった。江青たち4人組が逮捕された。1976年秋、女優の杉村春

子が電話をくれた。「あなたの探していた趙丹さんにお目にかかったのよ・・・ええ、お元気で」。

<生きていた。生きていた、アータンは生きていたぞ。私たち夫婦はその晩、アータンのために祝杯を重ね、酔っぱらった>

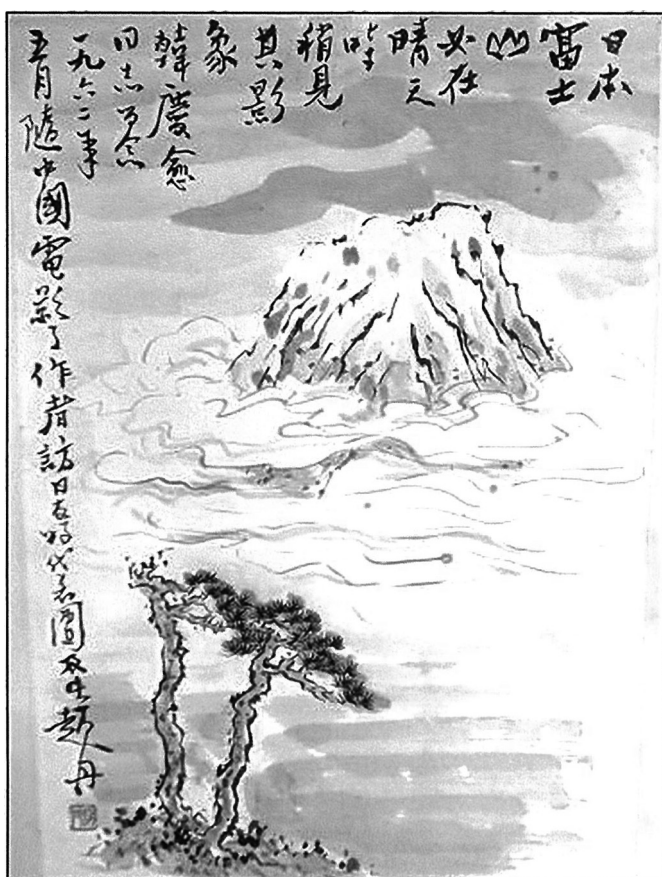
1978年、学者たちのツアーに参加した高峰夫妻は、別行動を取り、趙丹と北京で再会した。江青の過去を知っていた趙丹は、1968年から1973年までの5年3ヶ月、獄中生活を強いられていたのだ。

<僕は今年六十歳になった。一番仕事のできる五十五歳から六十歳までの過去五年間は、もう二度とかえってこない。あとは年をトルだけだ・・・それだけが、僕は口惜しい、ただ、それだけが・・・>と、初めて気弱な姿を高峰に見せたのだった。

趙丹は言う。高峰が折りに触れて、趙丹の消息を中国人に尋ねたことが命を救ってくれたのだと。<日本人が気にしている人間を殺ってしまうのは具合が悪い>。

<でも、あと一年、あそこ（牢獄）にいたら、僕は死んでいたかも知れない。人間の精神状況には限度があるからね・・・ほんとうに、ありがとう。感謝している・・・>

映画代表団の一員として日本に来た後、中国で『魯迅伝』をやる予定だと張り切っていた趙丹は、さあこれからという矢先に文革が起り、排斥され、獄中に入る状況に陥った。趙丹は絵がうまく、その面でも才能があり美術学校へ行ったことがある。絵描きになるか俳優の道を選ぶか迷ったこともあるそうだ。結局、役者の道を選んだが、絵描きの道を選んでいたらどうなっていたらうか。



《来日中に趙丹が韓慶愈のために書いた絵だ》

8 在日華僑に新中国を理解させたい

韓は、北京にある中日友好協会にいつも協力していたこともあり、協会からは常に、い

い友人を連れてきなさい、いつでも招待するからと言われていた。韓の方にも、有力な在日華僑なら、新中国への理解者を一人でも増やしたい気持ちが強かった。

そこで 1978 年、太極拳で後年名を馳せた楊名時を中国に連れて行こうと思った。韓は、楊名時とは 1940 年代から付き合いであり、楊から太極拳を教えてもらっていた。楊は武術が好きで空手をやり講道館にも通っていた。

その楊を中心に「七福神」という会があった。後に日中経済協会の理事長を務めた渡辺弥栄司も参加しており、彼から誘われて毎月会合に参加していた。

渡辺弥栄司は通産省の通産局長だったこともある。出世コースに乗っていたから順調に行けば次官になってもいいはずだが、「中国との交流をしたい、次官の座を捨ててもいい。岡崎嘉平太の鞆持ちでもいい、後継者になりたい」と協力を申し入れていた。

韓より 10 歳ほど年上である。そんな付き合いもあり、楊名時の太極拳に協力し、1970 年『簡化太極拳』という小冊子を発行した。楊名時の名前で出た最初の本である。

楊名時は、中国へ一時帰国したい気持ちを持っていた。しかし楊は、中国共産党と敵対していた閻錫山政府から派遣された留学生だったこともあり、一人で行くのは不安で躊躇していた。まして今は昔と違い共産党が支配する未知の中国であり、文革が終わったばかりである。

しかし韓は、「大丈夫だ、保障するよ」と安心させた。中日友好協会には親しい孫平化がいる、陳抗もいる、廖承志もいた。中国大使館から依頼され、訪日団や留学生のための免税店も出しており信頼関係はあった。楊は、韓の言うことだからと 100%信頼してくれ、韓と一緒に帰国してもいいと言ってくれた。

韓は中日友好協会の招待をとりつけ、中国側が楊の滞在費用をもつように計らった。そうして楊は韓と二人で、北京、楊の田舎である山西省、そして西安、南京、上海と 2 週間の旅をした。

中国では、歓迎ムード一色だ。故郷の太原は、閻錫山の故郷でもある。楊は有名な料理店を探し出しうまい料理を食べた。揚州の大明寺は鑑真和尚と謂れのある寺である。楊名時は、太極拳を日本で広めた自負を持っていた。自分を鑑真に例えるかのように高価な玉石の鑑真像を買い求め、太極拳のシンボルにした。韓が見るところ、それが楊を一番満足させたようだった。

西安では思わぬ交通事故にも遭った。昼食を取り、楊貴妃の浴場を見に行こうと華清池へ向う途中だった。赤信号のため、大通りの交差点で止まっていたところ、向こうからやってきた 4 トン・トラックが鋼材を一杯載せていたため、重くてうまく曲り切れなく横転した。韓たちの乗っていた乗用車のフロントガラスが粉々に砕けた。

危うく死ぬところだった。同行者の中国側の湯氏が 3 針も縫う大怪我を負った。北京から同行してきた人である。近くに病院があり入院したが、華僑関係の旅行社は、後は心配しなくていいということで、韓と楊は夜の汽車で南京へ向かった。

懐かしい中国に再会し、楊は思い残すこともなかった。

9 趙丹との懐かしい再会

北京では華僑大廈に泊まった。食事をしていると趙丹らしい男を見つけた。趙丹に会ったのは1962年だ。あれから16年経つ。本当に趙丹だろうか。疑った。昔と容貌が全く変わっていない。韓は思い切ってその男の前に行った。

「趙丹さんじゃないですか」「そうだよ、趙丹だよ」。韓は一呼吸おいて言った。

「韓慶愈です。覚えていますか」と訊ねた。

「小韓^{シヤン}じゃないか」

「まさかまさか」。あの趙丹との16年振りの再会だった。

変わっていないんだな。声といい、表情といい。髪の毛もたつぷりとある。さすが俳優だなと思ったね。韓は思いを込めて、今は亡き趙丹を偲んだ。

趙丹は、1980年10月10日北京医院で亡くなった。ガンだった。享年65歳だった。死の直前の1980年10月8日、趙丹の遺言ともいべき文章が『人民日報』に発表された。

「あまり細かいことまで規制すると文芸に希望がなくなる」と題されたこの文章には、長年、政治に振り回されていた芸術家の怒りをぶつけていた。「映画の問題で論争が起こるたび、私はいつも、発言したくなる病が頭を持ち上げた。それでも、自分を抑え、一言も言うまいと決めていた。しかし、今はもう怖いとは思わなくなった。幹部は芸術に口出しをすべきでない」と激しい言葉が綴られていた。

「骨は半分日本に眠る聶耳の墓の隣に、あとは柳州の蜜柑の木の下に埋めてほしい」とう言葉を趙丹は遺した。

韓は葬義委員会に弔電を打った「永遠の青年、趙丹さんに。いつまでも若々しい面影を我々に残してくれてありがとう」。

韓は趙丹との楽しかった日本での滞在を懐かしく思った。



《1977年4月、北京の華僑大廈で趙丹（右）と再会した韓、当時、韓は51歳だった》